日本ロマンス語学会
第 62 回大会
研究発表要旨

（2024 年 5 月 18 日・5 月 19 日 愛知県立大学にて開催）

<u>統一テーマ</u>：ロマンス諸語における統語論

【統一テーマ ①】「談話標識の統語論研究における形式と意味の関係について」

土肥 篤

生成文法に基づいた統語論研究では 90 年代終盤以降、文が持つ意味のうち語用論的側面と統語構造の関係を探究する試みが発展している。こうしたアプローチでは特にその発端となったイタリア語をはじめとしてロマンス語がしばしば観察の対象となり、談話標識 discourse markers（または談話辞 discourse particles、心態詞 modal particles 等）と呼ばれる一連の表現が注目されている。

談話標識にはたとえば文脈上に存在する想定を弱める際に使われるイタリア語 poi がある。関連する研究においてほとんどどんな場合にも受け入れられている前提は、これらの表現が複数の意味を持っているということである。すなわち、たとえば poi であれば「後で」を意味する時間の副詞とは異なる、談話標識としての意味を持っていると考えられている。これらの意味の間にある関係は、多義 polysemy なのではなく同音異議 homophony であるとみなされ、異なる統語構造と結びつけて分析されてきたが、近年になって、多義であるとする主張が現れてきている。

本発表では生成文法に基づいた談話標識研究による意味の扱いについて、特に多義であるとするものと同音異議であるとするものの立場をそれぞれ整理した上で、単義 monosemy として分析する可能性を検討する。

【統一テーマ ②】「スペイン語の siempre que 節における叙法、時制、アスペクト」

長 由佳

本発表では、これまで詳細な調査が行われてこなかった現代スペイン語の siempre que 節における叙法、時制、アスペクトについて、多くの実例を対象にした統計的分析と意味的分析を行った。スペイン王立アカデミー XXI 世紀コーパスにおける約 8000 例の siempre que 節を cada vez que 節と、筆者が入力・作成した YK コーパス約 250 例の siempre que 節と cuando 節や tan pronto como 節と比べて、siempre que 節の特徴を探った。その結果、XXI 世紀コーパスの siempre que 節における叙法は、直説法 51%に対して接続法 49%であり、siempre que 節における時制は順に接続法現在形、直説法現在形、直説法線過去形が多く、直説法点過去は少ないことが分かった。また語彙アスペクトについて、siempre que 節に高い頻度で現れる動詞上位 4 位と、主節における動詞上位 4 位は同じく ser, poder, estar, tener であり、全て未完了性を表していた。最後に意味的分析で、これまで行われてこなかった実例数の siempre que 節を観察した結果、siempre que が表す時間性がその条件性に関係しているのではないだろうかと考えた。

【統一テーマ ③】「フランス語の副詞 essentiellement の統語および意味の記述的研究」

宮腰 駿、渡邊 淳也

本発表はフランス語の副詞 essentiellement を統語および意味の観点から観察し、この副詞が持つ多様な用法を下支えする「意味構造」(宮腰 2023) を提出することを目的とする。

これまでのフランス語副詞研究ではこの副詞はあくまで分類研究 (ex. Molinier et Levrier 2000) の一事例として議論され、十分な観察が行われてきたわけではない。しかし、実際に用例を観察すると、この副詞のふるまいには注目すべき点が存在する。例えば、辞書における記述を確認すると、a のように「本質的に」と解釈できる場合と、b のように「特に」と解釈できる場合が存在していることが確認できる。

a. Cette philosophie est ***essentiellement*** matérialiste. (*Larousse*)

b. Prendre des mesures ***essentiellement*** dissuasives. (id.)

前者は主語の本質的特徴の表示に関わり essence という語彙との関わりが強いが、後者は mesures という対象の範列を取り上げる機能が卓越していると考えられる。この点で後者は日本語研究における「とりたて」概念 (ex. 沼田 2009) との関連が予測できる。この語彙的意味と機能的意味が統語や文脈とどのような関係にあるのかを明らかにすることがこの副詞の記述において焦点となる。本発表では最終的に essentiellement の多様な用法が生じるメカニスムについても発話論の観点 (cf. Franckel 2002) から一定の仮説を提出する。

また、本発表のような個別事例に注目したボトムアップ式の副詞研究がフランス語副詞の体系的理解にどのように資するのかについてもいくつかの先行研究 (Nølke 1993, Paillard 2021, etc.) を参照しながらあわせて議論する。

【統一テーマ ④】「ロマンス諸語の「未来・前未来・条件法現在・条件法過去」―統語的出現環境も視野に入れながら―」

山村　ひろみ

本発表は、フランス語・スペイン語・イタリア語・ブラジルポルトガル語・ポルトガルポルトガル語・ルーマニア語の「未来・前未来・条件法現在・条件法過去」の機能を、その統語的出現環境も踏まえながら考察したものである。その結果は次のようにまとめられる。

① 対象 6 言語のすべてにおいて、未来は当該事態の発話時以降への定位、前未来は発話時以後の時点よりも前に起こった未来の事態の表示という時間的機能を見せるが、それらのモーダル用法については言語間で違いが見られる。

② 条件法現在・条件法過去の語形成が未来・前未来の語形成をそのまま過去にシフトしたものとなっている言語では、その時間的用法はいずれも未来・前未来のそれと並行関係にあると言えるが、そのモーダル用法については言語間で違いが見られる。

③ 条件法現在・条件法過去の語形成が未来・前未来の語形成を過去にシフトしたものとは言えない言語の時間的用法は未来・前未来のそれと並行関係にはないが、そのモーダル用法は、条件法現在・条件法過去の語形成が未来・前未来の語形成を過去にシフトしたものである言語と同じ様相を見せる。

④ 当該言語の未来が条件節、when 節で出現できると、その前未来・条件法現在・条件法過去も同じく条件節、when 節で出現できる。このような当該時制形式の振る舞いは、当該言語における接続法の機能的活性度とも関係しているように見える。

自 由 テ ー マ

【自由テーマ①】「チャモロ語におけるスペイン語由来語彙の残存 ―Lihenden CHamoru における語彙の使用から」

結城 健太郎

チャモロ語はグアムと北マリアナ諸島で使用されるオーストロネシア系の言語であるが、この地域が長期間にわたりスペインの植民地統治下にあったことから、スペイン語の影響を大変強く受けている。現在、チャモロ語の言語復興運動の中でスペイン語系語彙の排除を試みる動きもあるが、Salas&Stoltz(2009)では、インフォーマント調査の結果をもとに、語彙の由来に関する知識が乏しいためにチャモロ語話者がスペイン語系語彙を区別できなくなっていることなどから、スペイン語系語彙を排除することは難しいと結論している。本研究では 2019 年に出版された Teresita Lourdes Perez による Lihenden CHamoru「チャモロの伝説」において、Salas&Soltz(Ibid.)で使用された同じ語彙的意味を持つオーストロネシア系語彙とスペイン語由来の語彙の出現回数を比較した。先住民であるチャモロ人が語り継ぎ、その文化を代表する物語群であることをから、オーストロネシア系の語彙が多用されることが予想された。結果として、オーストロネシア系語彙が優勢であるものの、スペイン語系語彙が使用されることもあり、とりわけ otro「次の」(スペイン語の otro「他の」に由来)と este「この」(スペイン語の este「この」に由来)は著しく多く使用されているということがわかり、スペイン語系語彙の残存はいまだ維持されていることを示した。

【自由テーマ ②】「フランス語における副詞的形容詞と 接尾辞 -ment を伴い競合する副詞の使用について」

関 敦彦

フランス語では形容詞から副詞を派生する場合、接尾辞-ment を伴うことが一般的である。しかしながら、一部の使用頻度が高い形容詞は接尾辞を伴わずに副詞的な機能を果たすことができる。これらの語を本研究では AA (Adjectif adverbial)と呼ぶ。AA の中には-ment を伴い派生した副詞(-ment 副詞)と意味的に競合するものが見られる(例：fort と fortement)。本研究では、AA が出現する表現と-ment 副詞が出現する表現の対照を行う。具体的な調査対象は clair と clairement、fort と fortement、net と nettement のペアである。ここで取り上げる AA は、フランス語 AA 辞典である Hummel et Gazdik (2021)の記述や発表者による調査をもとにして出現頻度が高いと考えられた語のうち、競合する-ment 副詞が存在するものである。本研究は、確認された AA および-ment 副詞の意味、共起動詞の意味や出現頻度等を分析することで、AA と-ment 副詞の使用に関する話者の言語知識を明らかにすることを目的とする。調査資料として、文学作品を中心としたフランス語書きことばの大規模コーパスである Frantext を使用した。フランス語の AA を扱った研究は形態統語論的観点からのものを中心に確認されるが、コーパスデータをもとに競合表現との対照を行った研究は見られない。本研究はこの点を補うことに意義があると考える。

【自由テーマ ③】「Se trata de の「難しさ」—文法化の観点から—」

蔦原 亮

ラテン語の tractare を語源とするスペイン語の動詞 tratar '扱う' は他動詞であるが、その用例を観察してみるとおよそ三分の一において再帰代名詞と前置詞を伴った se trata de という無人称表現として使用されている。本研究では se trata de の教授法の確立に向け、その性質、「難しさ」を考察する。まず、 この句が非母語話者にとって使いこなすことが難しいことを、学習者コーパス CAES から得られたデータを提示しながら指摘する。同コーパスによるとスペイン語の学習者は母語話者に比べ、1/3 程度の頻度でしか使えていない。併せて、既存の学習者向けの辞書などでこの句が十分に説明されていない現状にも言及する。次に、この句の使用を困難にしている理由として、現代スペイン語では se trata de という句は実質的にコピュラとして使用されることが多いこと、この用法が tratar の本来の語義から推測されないことを論じる。さらに、無人称表現であるにも関わらず、昨今では主語を伴った使用が定着しつつあること（El congreso IWANN se trata de un foro de discusión para científicos, ingenieros, educadores y estudiantes [...]）、つまり、未だに用法が拡張し続けているという事実も紹介する。最後に、「扱う」という意味の tratar がこのように用いられる事実の背後には文法化、構文変化といった現象があることを、通時データを紹介しながら指摘し、疑似連結動詞（verbo pseudocopulativo）として同様の機能を持つ ir 等と併せて指導する教授法を提案する。

【自由テーマ ④】「日本人フランス語学習者の自由会話における談話標識《bon》の一考察」

清宮 貴雅、川口裕司

現代フランス語の話し言葉では、様々な談話標識が使用されており 、« bon » もそのひとつである。談話標識 « bon » は、元来 lat. bonus から変化した形容詞 fr. bon が談話標識として使用されているものである。談話標識 « bon » にはさまざまな語用論的意味があることが先行研究で言及されている（Hansen 1995, 1995 ; Peltier et Ranson 2020 etc）。またフランス語非母語話者においては、中国人フランス語話者は、形容詞としての bon の使用の方が、談話標識の bon よりも多いことが明らかになっている（Deng 2022）。一方、日本人フランス語学習者の話し言葉における談話標識 « bon »に関する研究は管見の限り見られない。したがって本研究は新規性があると考える。

本研究では、日本人フランス語学習者の使用する談話標識 « bon » の質的及び量的研究を行う。日本人フランス語学習者とフランス語母語話者の話し言葉における 談話標識« bon » を分析することで、日本人フランス語学習者における 談話標識 « bon » の特徴を明らかにする。

（先行研究）

Barnes, B. K. (1995) “Discourse Particles in French Conversation: (eh) ben, bon, and enfin”, *The French Review* 68-5, p.813-821.

Crible, L. (2018). *Discourse Markers and (Dis)fluency: Forms and function across languages and registers*. Amsterdam: John Benjamins.

Deng, D. (2022) “*Bon ben enfin fin* in non-native speech: the case of Chinese L1 soeakers in Paris, *CMLF 2022*, p.1-15.

Ducrot, O. et Bourcier, D., Bruxelles, S. et al. (1980) Les mots du discours. Paris: Editions de Minuit.

Gilbert, J. A. (2019) *The Syntactic Environment of the French Discourse Marker* BON, Master Thesis at The University of Georgia, 2019.

Gülich, E. (1970) *Makrosyntax der Gliederungssignale im gesprochenen Französisch*, Münich, Fincke.

Hansen, M.–B. M. (1995). « Marqueurs métadiscursifs en français parlé : l’exemple de bon et de ben », *Le français moderne* 63, Nº1, p.20-41.

Hansen, M.-B. M. (1998) “The semantic status of discourse markers”, *Lingua* 104, p.235-260.

Lefeuvre, F. (2011) “*Bon* et *quoi* à l’oral : marqueurs d’ouverture et defermeture d’unités syntaxiques à l’oral”, *Linx* 64-65, p.223-240.

Peltier, J. P. G. et al. (2020). « Le marqueur discursif bon : ses fonctions et sa position dans le français parlé ». In: *Congrès Mondial de Linguistique Française* - CMLF 2020.

【自由テーマ ⑤】「中期ポルトガル語の動詞の語形に関する一考察」

水沼 修

ポルトガル語史研究においては，古ポルトガル語から中期ポルトガル語への移行期およびそれ以降の時期（14 世紀後半〜16 世紀初め）に，のちのポルトガル語を特徴づけるような数多くの重要な変化が起こったと考えられている．言語資料として扱われる中世ポルトガル語の文学テキストに関しては，オリジナルがポルトガル語で書かれているものは少なく，ラテン語やロマンス諸語から翻訳されたものが多い．本発表では，両動詞の語形に関し，(1)二人称複数形における*-d-*の脱落，(2)過去分詞*-udo-*から*-ido-*への移行，(3)三人称複数形における鼻母音化，等を取り上げ，上記時期に該当する 14 世紀末にポルトガル語で書かれたとされる文学作品である *Horto do Esposa* に見られる傾向と，他言語からポルトガル語に翻訳された同時代のテキストに見られる傾向を調査し，関連する先行研究の結果と比較対照し，それぞれに観察される特徴について考察する．